

第6回 日本伝道会議 コイノニア・サーバント（お世話役）の手引き

主の御名をこころより賛美いたします。

主の導きのうちに第6回 日本伝道会議の準備が進められていることを感謝致します。また、このためにコイノニア・サーバント（お世話役）という尊いご奉仕にご協力いただけますことを感謝いたします。

<交わりー本質的に重要な事柄>

「子供は普通一つの家庭の中に生まれる。一人のクリスチャンはクリスチャンの家族、つまり教会に生まれる。回心は、キリストとわれわれという線だけではなく、キリストに属する人々とわたしたちの間の多くの線によってあらわされる関係とかかわってくる。クリスチャン生活というものを、その深いところで共同体的な経験として理解していなければ、ほとんどそれを理解していないことになる。

自分がどん底に陥ったときに助けてくれ、霊的に太陽が輝いているような状態にあるとき、キリストにあってともに分かち合うことのできる友が、われわれには必要である。また、キリストの教会が多くを通過して築きあげてきたものによって、自分たちの誤りが矯正され、正しい見透しが与えられることも必要である。われわれが神のことに集中するために、その助けとなるような建物もまた、なくてはならない。自分ひとりでキリストを見い出せるかもしれないが、しかしキリストを信じる者たちの群れの中でだけ、われわれは真にキリストのうちに《とどまる》ことができるのである。」 「活動するグループ」 (KGK 新書 p. 57)

「交わり」というものを信仰の本質的な事柄、クリスチャン生活における本質的に重要な事柄として位置付けています。この交わりにおける成熟を日本伝道会議のコイノニア（小グループの交わり）において経験できるように願っています。

<コイノニアー福音を広めることにあずかる>

●ピリピ1：3～5

パウロは、どの手紙においても、ほとんど同じ形式で手紙を始めていますが、ピリピ書においては、格別に他のどの手紙にも見ることができないほどの親密さと愛情を込めており、それがひとときわ輝いているのを見ることができます。3節、4節。

「私はあなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り、」 (3～4)

ここには祈らなくてはならない…などという義務感の世界は少しも入る余地が無いかのようです。何しろ「祈るごとに、いつも喜びをもって」祈る…と言うのですから…。それは言うまでも無く、霊的な交わりであり、単に楽しいだけのおしゃべりの場ではありません。「祈るごとに、いつも喜びをもって祈り」共にとりなし合える…これ以上、親密なクリスチャンの交わりはないのではないのでしょうか？ 相手のことを「思うごとに…神に感謝し…祈るごとに、いつも喜びをもって」祈る…そんな交わりを私たちもこの日本伝道会議に期待したいのです。

パウロが、この言葉を述べたとき、彼はピリピから遠く離れたローマの地で獄の中に幽閉されていました。パウロとピリピの教会の人々との間には、地理的に大きな隔たりが存在していました。私たちも、全国各地から集う者として、そこにも大きな地理的隔りがあるはずで

にも関わらず、パウロとピリピの教会の兄弟姉妹たちが、このような祈りととりなしによって強く結び付けられた親密な交わりを持つことができたのは何故でしょうか？ それは5節にあるように、ピリピの教会の人々が、パウロと共に「福音を広めることにあずかって来た」(5) からに他なりません。5節。

「あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。」 (5)

さて、このように新改訳では「福音を広めることにあずかって来た」と訳していますが、協会訳（口語訳）

では、単に「福音にあずかっている」と訳されています。「福音を広めることにあずかって来た」というのと単に「福音にあずかっている」というのでは、自ずと意味が違ってきます。

5節の、この部分のギリシャ語（επι τη κοινωνια υμων εις το ευαγγελιον）には「広める」という意味の単語はありません。ここで「あずかる」と訳されているギリシャ語のκοινωνια（κοινωνια）は「交わり」という意味です。これは普通「～とともに」を表わす前置詞か、目的語の所有格（属格）を取ります。その良い例が7節にある「私とともに恵みにあずかった人々（συγκοινωνους μου της χαριτος）」です。この場合は「恵み」という目的語の所有格（属格：χαριτος）をとっています。ところが5節では、前置詞の εις と「福音」という目的語の目的格（対格：το ευαγγελιον）をとり、そのような用法によって「それに対して～」という意味を付け加え、ピリピの人々がただ受け身で「福音にあずかっている」だけではなく、さらに福音に対して主体的、かつ能動的に生き、福音を広めるような意味合いを込めてパウロは表現しているのです。（ライトフットも、F・F・ブルースもそのように解釈しています。）

つまり、パウロとピリピの教会の人々とは福音宣教のために苦楽を共にしてきた…そういう間柄であり、互いの間に、そのようなアイデンティティがあったということです。そして、そのようなアイデンティティがあればこそ、3節、4節に見るような互いのことを「思うごとに…神に感謝し」「祈るごとに、いつも喜びをもって」祈る…そういう幸いな交わりが存在していたのです。

「福音を広めることにあずかって来た」…そのような者としてのアイデンティティがお互いのうちにあればこそ、私たちも互いに祈り合い、励まし合い、協力し合うことができるのではないのでしょうか？ そして日本伝道会議でのコイノニアにおいて、3節、4節にあるように互いのことを「思うごとに…神に感謝し」「祈るごとに、いつも喜びをもって」祈り合う…そのような交わりが、ここからスタートし、継続、結実していくことを期待しています。

<期待と不安>

次の二つの質問について、しばらく考え、思い巡らしてみましよう。

Q. コイノニア・サーバント（お世話役）をすることに対するあなたの期待は何ですか？（短い言葉にまとめて書いてみましょう。）

Q. コイノニア・サーバント（お世話役）をすることに対するあなたの不安は何ですか？（短い言葉にまとめて書いてみましょう。）

思い巡らしたことを分かち合ってみましよう。

・他のコイノニア・サーバント（お世話役）たちと、この期待と不安について分かち合ってみましよう。

・その分かち合いから、どんなことを感じましたか？ その感じたことについて分かち合ってみましよう。

案外、他の人も同じような不安を抱いていることを知って、少し安心したのではないのでしょうか？ あるいは違った期待を抱く人から、新たな期待が膨らんだかも知れません。

期待は不安の裏返し…つまり期待をしつつも、その期待通りにならないかも知れないことを不安に思っているかも知れません。不安を越えた先に、期待されたものが神様によって与えられるのではないのでしょうか。

●1 ペテロ 4:11

Q. 奉仕する人は、何によって…、しかもどのように奉仕すると言われてますか？

何によって … 「 _____ 」

どのように … 「 _____ 」

しかも、それは何のため…と言われてますか？

何のため … 「 _____ 」

●2 コリント 12:9

Q. 神様の力は、どのようなところに、どのように現されると言われてますか？

どのようなところに … 「 _____ 」

どのように … 「 _____ 」

主は、ご自分の働きのために、弱さを持っている私を用いることができる方であり、何よりも主ご自身が働かれる…ということ、もう一度確認しましょう。

<聖書的なリーダーシップの原則>

●ルカ 22:24～27

この世の中一般のリーダーシップというのは、指導力、統率力、人間的な影響力、あるいは特別な能力によって、人の先頭に立とうとします。そして、人々の上に権威を揮って、支配する…というのが常です。ところがキリストの弟子である者は、決してそうであってはならない…というのが、イエス様のお言葉です。

Q. 「一番偉い人」「治める人」はどのような者になりなさい…と言われてますか？

「一番偉い人は（ _____ ）のようになりなさい。

また治める人は（ _____ ）のようでありなさい。」

「年の若い者」という言葉は、使徒 5:6、10 の「青年」と同じ言葉です。彼らはどのような人たちであったか…というと、アナニヤとサツピラの死体の後片付けをして葬る…という、あまり歓迎できそうにない仕事を、率先して請け負っているような人たちでした。

「仕える人」というのは、使徒 6:2 の「食卓のことに仕える」…「この仕事に当たらせ」られた人たちのことです。彼らは、使徒 6:3、4 によると他の人たちが「もっぱら祈りとみことばの奉仕に励む」ことができるようにと、この奉仕に当たっている人たちです。

私たちの主であるイエス様ご自身が、かえって「給仕する者」のようにされています。実際、イエス様は弟子たちの足を洗うことさえなさったのです(ヨハネ 13:12～14)。この模範にならうように言われています。このように「しもべ」として仕える姿勢が、何よりも求められています。

コイノニア・サーバント（お世話役）はグループの人たちを教えたり、指導したり、アドヴァイスするために、「教師・指導者」のような役割として立てられている訳ではありません。むしろ「触媒」的存在として、交わりの促進と深化のために仕えていただきたいのです。ですから、他の人の発言や意見、抱いている感情などに対して、評価を下し、それを正そうと忠告をするようなことは控えてください。

あまり気負いすぎないように注意しましょう。むしろリラックスして、語られるメッセージやグループの交わりに対して、自分の心を開いていくようにすれば、自然とグループ全体が和んできて、結果的に「しもべ」として仕える良い奉仕ができるものです。

さらに求められることは…

ルカ 22:26 の「治める人」というのは、使徒 15:22、ヘブル 13:7、17、24 の「指導者」と同じ言葉です。ヘブル 13:17 によると、彼らは、メンバー一人一人の「たましいのために見張りをしている」人たちです。そのようなメンバー各自の霊的な状態に対して気を配って、特に、このことのために人に仕えていくことが求められていることも覚えておきたいと思います。このためには、次のいくつかの具体的なことが求められるように思います。

(1) 霊的配慮における敏感さ

メンバーの霊的、精神的状況に対しても注意を払うように心がけましょう。特に初めての人や若い人たちは、場慣れしていないために緊張して、精神的に疲れるものです。また、場慣れた人でも、問題を抱えており、それを覆い隠すために意識してか無意識かは別としてでも仮面をかぶっている…という場合もあるので注意が必要です。

(2) 聴く努力

相手の霊的な状況を知るには「聴く努力」が必要です。まず適切な質問をして尋ねるということ。そして、相手のその言葉によく耳を傾けて聴く（傾聴）ということが大切です。口でしゃべったり、説明したり、説得したりすることよりも、耳を傾けてじっくり聴くことの方が大切です。「聴く努力」こそ、具体的な愛の実践であることを覚えましょう。

(3) 沈黙を恐れない

コイノニアを導く者として、交わりでの沈黙を恐れるかも知れません。交わりの質ということを考えると、明るく楽しく、絶え間なく饒舌におしゃべりが続くばかりが、必ずしも良い交わりとは言えません。沈黙を恐れて、リーダーがすぐに何か言葉を挟むようにしていると、交わりが上滑りした上辺だけのものにもなりかねません。むしろ交わりの質が深くなり、語られる内容もより個人的、内面的な事柄になれば、それだけ会話のスピードもゆっくりとなり、特に深刻な内容が分ち合われた場合には、重い沈黙を迎えることもあります。しかし、そのような沈黙には意味があります。沈黙を恐れず、意味のある沈黙を大事にしつつ、交わりが深まるように心がけましょう。

(4) 祈り

「霊的配慮における敏感さ」「聴く努力」…これらのことが、コイノニア・サーバント（お世話役）として充分はたせるように祈ること…。そしてメンバー一人一人のために執り成し、神様からの恵みと祝福を祈ること。

<コイノニア（小グループの交わり）の重要性>

(1) 交わりの深化

日本伝道会議のように大勢の人が集まる場では、すべての人と深く知り合うのは不可能です。多くの人と浅く交わるよりも、数名の人とではあっても、深い人格的な交わりを持つことが、出会いと交わりの素晴らしさを経験するには重要なのです。それぞれの「コイノニア（小グループの交わり）」が、そのような交わりを経験する場になることを、心から願っています。

(2) お互いの配慮の場としてのコイノニア（小グループの交わり）

初めての参加者、内気な人も、小人数のグループでの交わりなら、心を開きやすく、自由に話したりすることができるでしょう。そして日本伝道会議の中に居場所を見出し、単なる受け身の参加者にとどまらず、積極的、主体的な参加を励ます場として小グループの交わりとしての「コイノニア」は非常に重要です。

(3) 神を証する交わりとしてのコイノニア（小グループの交わり）

「神を見せてくれ…、そうしたら信じる。」というようなことを多くの人が言うかも知れません。このような要求に対して、私たちは答えることができるのでしょうか。ヨハネ 1:18 によると、イエス様は、まさに神様を私たちに示し、現すために来られた…とされています（「説き明かす」は、「あらわす」〈口語訳〉の意

味を持つ)。また、ヨハネ 14:8 の「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」というピリポの言葉に対して、「わたしを見た者は、父を見たのです。」とイエス様は答えられました。しかしイエス様のご在世当時ならともかく、今この地上でイエス様を通して神様を見ることはできません。では、「神を見せてくれ。」という要求に、どのように答えることができるのでしょうか。聖書は何と言っているのでしょうか。

●1 ヨハネ 4:12

Q. 「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。」 この目に見えない神様は、どのようなとき、どのようなかたちで、ご自分を現される…とっていますか？

「もし（ ）なら、神は（ ）おられ、
神の愛が（ ）のです。」

神様は確かに目には見えないお方です。しかし「もし私たちが互いに愛し合うなら」…神様は「私たちのうちにおられ」、その愛のうちにご自分を現してくださる。また、人々もその「神の愛が全うされ」た、その交わりの中に神様を見いだすことができる…ということです。私たちクリスチャンの信仰による愛の交わりの中に、特に神の愛とその聖さというものを現わし、そのことをもって神様を証するのです。

●ヨハネ 13:34～35

私たちは「互いに愛し合う」ということによって、自分たちがキリストの弟子であることを証し、それをもって神様を証するなら、人々もそこに神を見いだしていくのです。

このように、キリストの愛の支配する交わり…「互いに愛し合う」交わりというのは、神様を証する交わりなのです。

<実践的な準備>

《日本伝道会議前》

(1) コイノニア（グループタイム）の計画を事前に準備しておいてください。自己紹介の仕方なども、事前に考えておくことと良いでしょう。（「グループの交わりの進め方」を参照。）

(2) グループのメンバーが知らされたら、名前、教会などを覚えて、一人一人のために祈ってください。特に、初めて参加する人のために、覚えて祈りましょう。

(3) 第6回 日本伝道会議のテーマ、内容、プログラムなどをよく把握しておいてください。

テーマ：

主題聖句：

講師：

<コイノニア（グループの交わり）の進め方>

コイノニア（小グループの交わり）を進める際、初め（初日～2日目）は、まずお互いをよく知り、心を開いて打ち解け、馴染めるために、交わりの内容をよく考え配慮する必要があります。初めから無理して、個人的なことや深い事柄について話し合おうとすると、かえって心を閉ざしてしまうことがありますので要注意です。

反対に、後半（3日目～最終日）になっても表面的な会話や情報交換などに時間を割いていると、表面的な交わりで終わってしまい、実のある交わりになかなか深まりません。

《コミュニケーションのレベル3段階》

1. 情報交換のレベル

例えば、自己紹介での名前、教会、職業、趣味など。
パーソナル（個人的、人格的、内面的）な内容は話されません。

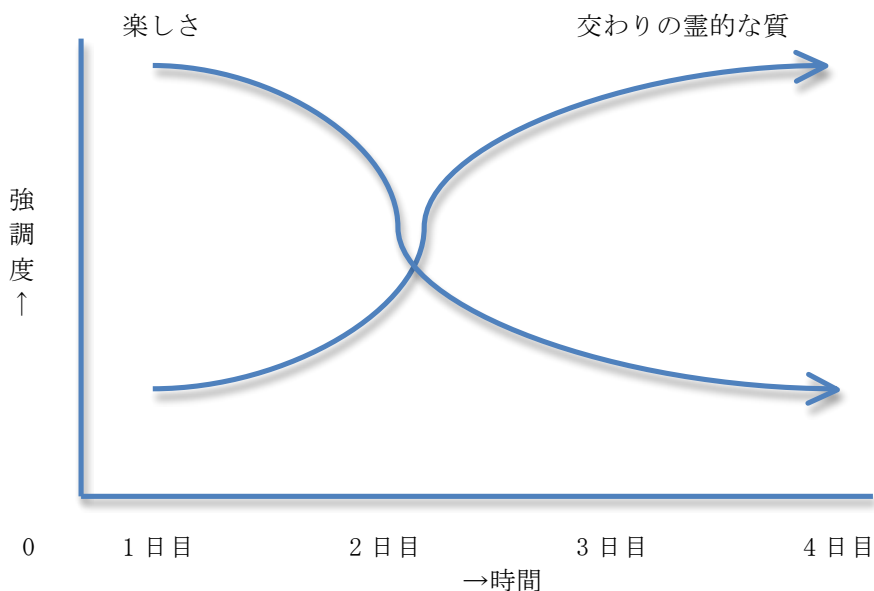
2. 意見交換のレベル

自分がどのような考えを持っているか…ということが語られます。
情報交換より、さらにその人自身のことが分かち合われます。
その意見の内容を正確に理解しようとする努力が必要です。

3. 感情交換のレベル

ある意見が正しいか、正しくないかの評価は別として、なぜそのような意見を持つのか、その背後にどのような感情があるのか…ということを理解しようとする努力が必要です。
そのような感情が分かち合われ、その感情に対して正しいか、正しくないかの評価をするのではなく、そのような感情をいだいている事実を認め合うことが重要です。
そのとき、そこにより深い交わりが生まれます。

《交わりのグラフ》



プログラム全体の流れの中で、グループの交わりの質がどのような段階にあるかをよく考えながら、グループの交わりを進めていきましょう。いつまでも情報交換のレベルや表面的な楽しさだけにとどまっているなら、それが深まるようにコイノニア・サーバント（お世話役）自らが少し個人的な分かち合いをするとよいでしょう。

以下、グループタイムの内容について、一応の目安を記します。参考までに…。

【1日目のコイノニア（グループタイム）】

初めのうちは雰囲気を和ませるために楽しく冗談を言える雰囲気づくりもよいでしょう。但しそれだけで盛り上がり終わらないように注意しましょう。（その後も交わりが安易な方向に流されてしまう可能性があります。）自己紹介の内容も、楽しくお互いの人柄を知り合えるようなものを工夫できたらよいでしょう。またお互いの状況を知り合うために「期待と不安」について分かち合うのも良いかも知れません。

【2日目のコイノニア（グループタイム）】

その日の主題講演の分かち合いをメインにするように心がけましょう。

【3日目のコイノニア（グループタイム）】

その日の主題講演の分かち合いをやはりメインに…。交わりが深まってきて、個人的な問題や悩みを打ち

明けるような人がいたら、それを大切にみんなで話し合い、分かち合うように配慮しましょう。さらに今後の宣教協力にも繋がって発展していくような交わりになるように意識してみましょ。丸一日ある最後の日なので、交わりの質を意識しましょう。

【2日目と3日目 コイノニア（グループタイム）以外での時間】

そこでの何気ない交わりも大切にしましょう。個人的にじっくりと交わる良い機会として有効に用いましょう。こういう意識がとても大切です。案外こういう時の会話をきっかけに心を開くこともあります。

【4日目のコイノニア（グループタイム）】

最後のコイノニア（グループタイム）なので、4日全体を振り返っての恵みを分かち合いましょ。全体を振り返る時間を各自持って、それを分かち合うように励まします。

<日本伝道会議当日の諸注意>

(1) コイノニア・サーバント（お世話役）は「静思の時」（ディボーション）を大切にしてください。特に、他の人への霊的な配慮をしていくコイノニア・サーバント（お世話役）には、この朝のひとときを大切にしてください。多くの人と共に過ごす中で、一人神様の御前に静まり、自分のために御言葉を味わい、祈り、また他の人のために執り成し祈ることは大切です。

(2) 初参加の人、若い人には十分に配慮しましょう。その人に目と耳を傾け、ただ言葉だけでなく、相手の気持ちを理解するように心がけ、分かち合いへの積極的参加を励ましましょう。何よりも良い信頼関係を持つようになることが大切です。

(3) 喋りすぎる人には、他の人の意見に耳を傾け、他の人の発言を励ますことの大切さを早い時期に伝え、そのために協力してもらえるように促しましょう。

(4) 機会があれば、個人的に交わることを意識しておいてください。同じグループで4日間を共に過ごすコイノニア・サーバント（お世話役）が、良い人格的關係の中で問題を個人的に分かち合うことで、大きな助けと励ましになることが出来るかも知れません。あまり無理はせず、相手の状態を配慮しつつ個人的な交わりを持ってみましょう。

必要とあれば、助けになる他の人との橋渡しになって、個人的な交わりを持つように励ましてください。しかし、それぞれ各自の所属教会での生活を励ますことが基本ですから、すぐに自分の教会に誘ったりすることに対しては、節度を持って慎んでください。

(5) クリスマンでも、救いが個人的に明確でない人、教会生活に問題がある人、大きな問題や悩みを抱えている人などもいるかも知れません。あるいは伝道者であっても、疲れ果てている人、大きな問題を抱えて人もいるかも知れません。そういう点も意識しながら、互いに自分の弱さや課題が正直に分かち合える交わりができるように、心がけておきましょう。

<日本伝道会議後>

特に日本伝道会議後の交わりや協力関係が継続、発展するために、祈りのうちに交わりを継続するように務めていただければ幸いです。

<終わりに>

やはりコイノニア・サーバント（お世話役）の奉仕は大変…と思われたでしょうか。そう思った分、主に委ねて祈って備えましょ。それぞれ各自の教会でも、背後で祈って支えてもらうようにしましょ。